2021年 新年の干支 「辛丑（かのとうし･しんちゅう）」に思う
痛みの伴う幕引きと大きな命が芽吹く年！！
「 環境経営 」SDGs（持続可能な開発目標）の実践！！

株式会社 山西 あすなろ会顧問 代表取締役社長 西 垣 洋 一

新年を迎え、謹んで新春のお慶びを申し上げます。
旧年中はあすなろ会の皆様には、格別のご高配を賜り厚く御礼を申し上げます。

オリンピックイヤーとして始まった2020年は、正にコロナ禍一色の年となってしまいました。未知のウイルスは、パンデミック（世界的大流行）を引き起こし、人類は今なおその脅威に晒されています。日本でも現在第3波が襲来、感染が再拡大し、医療体制が逼迫、GoToトラベルも一時停止され、医療体制の崩壊、経済活動の再停止の瀬戸際に追い込まれています。又感染防止策により生活様式は一変、企業活動も多くの制約を受け、日本経済は大きな打撃を受けています。

2021年の干支は、「辛丑（かのとうし・しんちゅう）」になります（右　干支の智慧参照）。「辛」は季節で言えば秋の終わり頃、植物なら枯れた状態であり、実は腐って地面に落ち、次世代のタネを大地に落とす途中。「丑」は発芽直前の曲がった芽が種子の硬い殻を破ろうとしている状態で、命の芽吹きを表しており、種の中に、はち切れそうなくらい生命エネルギーが充満している状況を言います。又「辛」と「丑」は「陰陽五行」では相手の力を生かし強めあう「相生」の関係です。干支は本年を緩やかな衰退、痛みを伴う幕引きと、新たな命の息吹が互いを生かし合い、強めあう年になると指し示し、大きな転換期の年となると教えています。

コロナ禍が招いた未曾有の事態は、社会、経済、生活や暮らしに不可逆的な大変革をもたらしました。只、昨年末には海外でのワクチン接種が始まるという明るいニュースもありますが、本年はこの歴史的な大転換をどのように乗り越え、社会やビジネス環境の変化にいかに適応していくのか、私たちの知恵が試される年となります。

翻って木材　住宅業界は、このニューノーマル（新常態）への適応と伴に、中長期的な新設住宅着工数が減少する中、非住宅分野の木造化・木質化など新たな需要の創造が急務となっています。昨年設立した「環境都市実現のための木造化・木質化推進あいち協議会」をはじめとする、業界の非住宅分野の木造化・木質化の取り組みは、再生可能な資源である木材の有効活用を図ることを通じ、「循環型社会」、「低炭素社会」を推進、地球温暖化の防止に貢献し、そして地球規模の課題として認識されているＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の理念にも合致します。私たちは、このことをしっかりと認識し、矜持を持って、都市の木造化・木質化に取り組む年としなければなりません。

当社としては本年を、「環境経営元年」としＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）を実践し、ＥＳＧ（環境・社会・ガバナンス）投資を行い、新しい時代、ニューノーマルへの適応に向け、環境整備を皆様と共に進めて参ります。

コロナ禍が続く厳しい年の始まりになりますが、皆様方におかれましても、感染防止に細心の注意を払って頂きたいと思います。最後になりますが、皆様のご健康と事業発展を心から祈念申し上げ新年の御挨拶とさせていただきます。

2021年1月吉日

◆干支の智慧　－ 辛丑（かのとうし･しんちゅう） －

「 本年の干支は、「辛丑」になります。十干の「辛」は五行では陰の金で、十二支の「丑」は五行では陰の土となり、金生土の相生という状態になります。相生とは相互助長のことで、金生土は土から金が生まれることを指し、吉の状態とされています。また、植物に例えると、「辛」は草木が枯れ、新しくなろうとしている状態を指し、「丑」は種から芽が出ようとする状態を表します。つまり、「辛丑」の年とは、植物の芽が種の中で眠る状態で、物事を始めることで伸びやすくなる、ゆっくりと歩み始めるという年。事業においては、新しい芽（新規事業や新戦略）などを決めてスタートすると良いタイミングであると言えます。新型コロナ、デジタルシフト等でいろいろなことが新しい局面となりました。目まぐるしく事態が変わったとしても、牛のように慌てることなく腰を落ち着けて、新しい時代を勝ち抜ける“新しい芽”を出していきたいものです。 」

◆干支の格言　（ “丑（牛）”にちなんだ諺･経営語録 ）

- 「牛の歩みも千里」
  進みぐあいの遅いことのたとえが牛歩であるが、いくら遅くても着実に休むことなく歩み続ければ千里の遠い道のりも容易にクリアすることができること。着実に努力することで、大きな成果が得られることを指す。
- 「商いは牛の涎（よだれ）」
  商売というのは牛の涎が長く垂れるように、気長く努力することが大切であるという意。早く結果を出そうとして焦ってはならないという戒めでもある。
- 「角を矯（た）めて牛を殺す」
  曲がった角を直そうとして、かえって牛を殺してしまうことから転じて、小さなことにとらわれていると全体をダメにしてしまうことがあるという意。
- 「牛首を懸けて馬肉を売る」『晏子春秋』
  牛首とふれこんで、実際には馬の肉をうることで、言うことと行なうことが相反することのたとえ。言行一致こそが信用を築くという教え。
- 「呉牛（ごぎゅう）月に喘ぐ」『世説新語』
  呉牛（水牛）が暑気を恐れて、月を見ても太陽と思ってあえぐこと。恐れたり嫌ったりするあまり、思い過ごして苦しむことのたとえ。無駄なとり越し苦労。
- 「牛鼎（ぎゅうてい）の意」『史記』
  力のある者や目上の人に自分の考えや意見を認めさせようと思ったら、まず相手の意（気持ち）を迎え入れ、そして相手に認められてからにすべきだという意。いかなる正論も、主張する自分が認められてこそ商品を売り込むことができる。
- 「羊を以て牛に易（か）う」『孟子』
  多少の違いで、本質的には変わりがないこと。小さな物を大きな物に代用する意味もある。